

---

# Train Road

日向夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Train Road

### 【Nコード】

N6266H

### 【作者名】

日向夏

### 【あらすじ】

ごくごく普通の女子高生の紀陽と、線路向かいに住んでいる幼馴染・慶の微妙な関係を描くラブストーリーです。完結しました！！読んで下さった方、ホントーに、ありがとうございます！！ m

(一) m

## 始発（前書き）

えと、作者の久しぶりの長編なので変なところもあるかもしれませ  
ん。その辺あまり気にせず、長い目で読んでいただければ幸いです。

## 始発

おはよー！ 今日も眠たそーな顔してるなあ

るせー、いつも怒ったような顔してるヤツに言われたかね

んだと、このやろっ

…届いてねえぞ

うるさい！ あんたが背ー高いのが悪いの！

お前がチビなんだろ。オレの肘くらいの身長でオレの頭に手を伸ばそうってのが、そもそも間違いなんだよ

……………（むすー）

ほらほら、電車来ちまつぜ。行こうか

…うん

いわゆる幼馴染というヤツは、面倒だ。

例えば相手が男（もしくは女…っていうか異性）だった場合、まず騒ぎ立てられるのは付き合ってるかどうかだ。

大体、小さいときから一緒にいるからそーゆー事なんてまず考えない。

騒ぎ立てる人は少女マンガの読みすぎだ。

遊び仲間、って言うのが一番しつくりするかな。

友達に欲情してたら、キリがないでしょう。

それでも相手がイケメン（もしくは美人）だった場合は、一緒に帰っただけで即刻大騒ぎになるけどね。

「…紀陽センパイって、東條先輩と付き合ってるんですか？」  
キタよ、キタよ、きちやったよ。今年に入って何回目かな。

「…付き合ってるないよ。ああもう、言い飽きたなあー。ただの幼馴染だって、ウン」

それでも、目の前の部活の中で一番背の低い後輩は納得しなかったようだ。

「でも、先輩たちいつも一緒に帰ってるじゃないですか。それって、どうなんですか？」

「えー、だって向こうがこっちの下校時間に合わせてくるんだもん。不可抗力だよ、電車で帰ってるんだし」

……アレ、自分で言ってる気づいたけど…。

「それって、東條先輩の方が紀陽先輩のこと好きなんじゃないんですか？」

「…私には答えられない質問だねー、東條に聞いてよ。私はあいつの事は遊び仲間としか思っていないから、そこんとこヨロシク」

「はい……」

ホントかなあ、と言う疑問を滲ませながら校舎へと歩いていく後輩の後姿を見て、あの子も即答で断られるだろうな、と思った。

これで…何人斬り？ 分かんないけど、相当数なのは確か。

てか、何でアイツもこんなに断ってるんだろ？？ 中には、私でさえカワイイなあって思う子もいたのに。

ま、いいか。

私が気にすることじゃない。

本日もご乗車いただき…（前書き）

何だかんだ言って、結局10日近く更新に掛かってしまいました。  
スイマセン（汗）

本日もご乗車いただき…

うーん、気持ちは嬉しいけど、そいつは無理なお願いだなあ

そう…ですか…。ありがとございました、聞いて…くれて

ごめんね

…ぶつちやけ、東條先輩は城崎先輩のことが好きなんですか？

はい？

だって、電車の時間合わせて帰ってるそうじゃないですか

うーん、紀陽のことは好きだよ。いい友達だと思ってるけど、…そ  
ういう意味じゃない方？

そうです、当たり前じゃないですか

まいったな……

「そついやーさー、部活の後ウチの後輩がコクリに行ったよね」  
なんなんだろ、これっぽっちの事訊くの何でこんなにキンチョー  
してるんだろ。

「あア…、居たねえ。うん、丁重にお断りしたよ」

はあつ、良かった……って、何で安心してんだよ私!!

「あのコ、物分かりいいから手間掛からなかったでしょ」

「まあ…、3年のバカ女子よりは説得しやすかったな。まあアイツ  
が手間掛かりすぎたからなー、その点ビミョーだけど」

「次の一週間ガツコ来なかったしね」

「だいたい、学校にまで化粧してくる暑苦しー奴なんか好きじゃね  
えつつの。オレはさっぱり系が好きだな」

「なんか味の好みの話になってきたような…」

「焼肉にはポン酢だな」

「やけにあっさりめだな!? てか、つつこませんなっつ」

口角をくいと斜め上に上げて、にやりと笑う東條慶は色っぽい…  
ともっぱらの評判だそうだ。

にやり笑いにまで色っぽさを求めなくてもー、と思うのは私だけ??  
「紀陽のツツコミが絶妙なんだよ。そんな事より、さっさと降よう  
ぜ」

「あつ、ヤバ。気付かなかった…」

私たちの家は、線路を挟んで向かい合っている。

私の家が自転車置き場の隣、慶の家が送迎用・職員用の駐車場の隣

だ。

小さい頃から、慶は私に会いに来るときは線路の上を通ってきた。危ないからやめてよって、言っているのに彼は

「少しスリルがあった方が、おもしろいだろ？」  
の、一点張り。

まあ気持ちは分からなくもないけど。

最近はお互いの進路も考えなくてはならなくて、慶が訪ねて来る頃には終電もとっくに行ってしまった後なのだけど。

線路脇の金網に座って、他愛の無い話をしている時が一番の癒しの時間になってる。

…なんて、私どんだけ慶に入れ込んでるよ。おいおい。

ただ今、列車内が大変込み合つて・・・

よお

わっ！！ ……ビックリした、今折角試験勉強始めようと思つてたのに  
悪い悪い、ちよつと顔見たくなつたもんで

どんな理由だよっ！

えー、いいじゃねえかよ。減るもんじゃないし

そーゆー問題じゃなくて！！

「慶はわあー」

さつき近所のコンビニで買ってきたペットボトルのサイダーの蓋を開けるのに苦労しながら、線路と道路を隔てる金網の上に座っている幼馴染を見上げた。

「何で女の子達の告白を断ってるの？ 誰か好きな人居たりすんの？」

「！！ ゲホツ、ゴホゴホ……」

飲んでいた缶コーヒーに咽たのは、座っているせいでよく分からないがすらつとした長身の男。

「大丈夫？」

怪訝そうな顔をして見上げるその先には、都会の喧騒と照明によって薄汚れ、淀んでしまった闇空があった。

「大丈夫だけ……てか、考えても見るよ。よく知らん奴がオレのこと好きだから付き合えっつーんだぜ、オレの何に惚れてオレの何を理解してんだっつの」

「ま、まあね……。でも、満更でもなかったりするんでしょ」

「うーん、女の子に好かれるのは悪い気はしないけど……」

「け、けどって……」。

「オレはせめて友達から始めて欲しいな。まっ、多分ずっと友達止まりだろうけどな」

「分かるー！ 流石に私にコクってくるバカな奴は居ないけど、多分同じ事思うと思うよ」

半分冗談のつもりで言ったその言葉に、一瞬で慶の顔から表情が消えた。

「じゃあ、友達からならいいんだな」

へ？

「ど、どういうこと？」

シャンツ

金網から飛び降りてちょうど私の隣に着地した慶は、蒼い月明かりと街灯の光を受けて、知らない男に見えた。

「紀陽……」

「な、に…?」

「蓋、開けてやるのか?」

そういえばさつきから開けようとして、手が滑って全然開かない蓋にイライラしてたんだった。

「いいの? やった、ありがと」

プシュッ

炭酸独特の空気が抜けるような音がして、私があれば悪戦苦闘していた蓋はカンタンに開いた。

「うわあ…、簡単過ぎてなんかムカつく」

「お前が力なさすぎなんだよ」

「るせー」

顔をしかめて舌を出す。

「そんなトコも、好きだけどな」

……………はい???

え、今、サラッと流されてよくわかんない…

ええ???!

「だから、好きだった」

ただ今、列車内が大変込み合つて・・・（後書き）

これ、最初考えてたのとはちょっと変えました。  
あんまり展開速すぎてもアレですから。  
ただ今、自分を焦らします。

席は譲り合って座りましょう

何その爽やかスマイル!!

え？ だって、やっと分かってもらえたかなと

唐突過ぎてワケが分かりませんって!!

.....

「はあああああ〜〜〜」

本日7回目の超特大溜め息。

この溜め息とともに、あの記憶もどっかにすっ飛んで行けばいいのに。

「なに〜？ 物憂げな溜め息。さては幼馴染の彼と何か進展があったな」

う、ヤバ。凶星だ。

いや、こういう時こそ落ち着いて対処すれば、金輪際変なウワサとおさらばさ。

「いやいや、大学どこにしようかなーって事で悩んだの。流石に東京大学レベルまでは頭良くないからねえ」

「ええ〜！？ 嘘だあー、東大いけるって、紀陽なら。いつその事東條君と一緒にいけば？」

結局そこに戻るんかい！！ 折角話題逸らしたのに……。

「無理無理、同じ東大なら私は東北大学にするね」

「あ、そっちの東大？」

結局今朝は恥ずかしすぎて慶の顔も見ずに、一本早い電車で来ちゃったし。

メールの返信も、超そっけない絵文字もデコメもないメールになってたし。

・・・引きずり過ぎ、かな…？

「・・・パイ、先輩！！」

「はいいっ！ なんでしょーか!？」

記憶の世界にどっぷり浸かっていたので、いきなり後輩の声が聞こえてきてビックリした。

「どうしたんですか？ さっきからボーっとしてますけど…」

「あ、いや。期末テストの英語の出来が気になって。2、3個単語の綴り間違えたような気がするからさー」

咄嗟にもっともらしい嘘を吐けて良かった・・・ギリギリセーフ。

「先輩なら大丈夫でしょう、それより部活終わったら先輩に話があるって言ってきた人が居て」

「え？ どんな人??」

ヤーな予感……。

「えーと、名前は言わなかったんですけど超頭悪い私立高校の制服着てましたよ。パツと見、先輩たちと同じ学年に見えましたけど」

……心当たり、無いなア……。

「あたしは良い印象受けなかったですけど。イマドキ女子高生で金髪って意外とレアでしょうね」

「……そりゃ良い印象じゃないわ（汗）」

大人は女子高生で不良って言うと、まず真っ先に金髪を思い浮かべるかもしれないけれど、日本人には金髪が似合わないようになってるんだよ！！

気色悪いだけだったの！！

「えー、で。ソイツなんか他に言ってた？」

「いや、特には。怒ってるっぽい雰囲気でしたよ、東條先輩にも一緒に居てもらった方がいんじゃないですか」

うー…ん、アイツ絶対知らせるって言いそうだけど、個人的には面倒くさいからそういうのと関わりたくないんだよなあ。

「いや、こういうのはきつとボコされるのがオチなんだよ、きつとだから、気付かれない内にさっさと帰るよ」

「……そうですね、早退します？ 先生に言っときますよ」

「マジで？ やった、ありがと。じゃあそういうことで」

後輩の申し出をありがたく受け取って、私はエナメルバッグを肩に担いだ。

席は譲り合って座りましょう(後書き)

いやー夏休みの後半って、大抵宿題終わってメチャメチャ暇が、宿題全く手をつけてなくてんやわんやな時とありますよね。

ちなみに今、日向夏は後者のほうです(笑)

小説更新してるヒマあったら宿題しろ!!(大爆笑)

携帯電話での通話は周りの皆様のご迷惑となります（前書き）

サブタイトル長っっ！！

**携帯電話での通話は周りの皆様のご迷惑となります**

メール 『私、今日用事があつて先帰るから、

待たなくていいからね、

よろしく〜』

何事も無く家に着けたー…。

今度はケー番知られて呼び出し食らうとか。

ハハ、まさか…ね。

ピリリリリリ…。

思った瞬間にコレ！？ 何とまあタイミング良く…。  
しかもまさかのこの着信音！。

確か…非通知設定か知らない番号からだ、この音になるような…。  
・（ないような）。

うう…この電話とりたくない…、でも気付いちやったら気になる…。  
えーい、イチかバチかだ！  
ピッ

「…もしもし」  
『うるせえ！！！！』

開口一番にそれかよ！

思わずケータイを耳から離す。

自分の方がうるさいんじゃないんですかー。

『てめー何が気取って『もしもし』だ。キシヨイんだよ！ 今からお前んち乗り込むのと、お前が自主的に出てくるのとどっちがいい？？？』

そんな早口で言われても…、すぐには反応できないよー。

「え、ーっと。どちらさまで？」

『んなことオメーには関係ねえ。さっさと出て来いやー！！』

女…の声、にしては低いなあ…。

逆らうとマズそうだね、しょうがない、素直に行ってやろう。

「…わかったよ」

家から出てみると、そこには予想もしなかった光景が広がっていた。  
まず先頭に立っている女…もとい、オカマちゃん。

最近ではニューハーフとか言うらしいけど、コイツは絶対に安くい  
トコでやったなつてのが丸分かり。

薄っすらヒゲ生えてるし…夜だから？

で、その後ろに控えているのは…なんかどっかで見たとあるなあ…。  
…。

って、ウチのガツコの制服じゃん。どーりで見たとあるような…

(ないような)。

その更に後ろには、たくさんのバイク。・・・暴走族か!!  
リーゼント居るし...いやー、レアだね。何かウケる(笑)

ガム噛みながらガン見してるし、先頭の女(?)。

この状況、きつとアレだ、私だけじゃ何ともならないってヤツだ。

こーゆー時は、(多分)問題になってる男の手を借りた方が早く終わるんだよ、多分。

でも、今朝から避けてたのに来てくれんのかな、アイツ。

でも、コイツしか私の呼び掛けにすぐ応えてくれそうな奴はいないから...。

後ろ手で、ケータイのキーを押し始めた。

携帯電話での通話は周りの皆様のご迷惑となります（後書き）

バイクに乗ってるリーゼント。

実はコレ、日向夏がこないだホントに見かけたんです！！（笑）

そんな時も激レアだと思いましたが・・・アハハ、小説に出すとおいしいキャラだなあと。

まあ彼、全然喋りませんが。

黄色の線の内側へお下がりください(前書き)

電車乗る前によく聞くけど、文字にすると何か変だな…  
サブタイトル・・・

黄色の線の内側へお下がりでください

何か、話し合って解決しようつつつてもダメっぽい雰囲気だね

当たり前じゃない。対等に話そうだったって、あたしとあんたが初めから対等なワケないじゃない

そうだねえ、ゴメンネ、遙か上の立場で

ざけんじゃねえよ!! 逆だっつのっつ!!

ガッシャーン!!!!

「あーあ、器物損壊だよ。警察呼ぼうかな」  
相手のオカマちゃんが握った金属バットは、手近にあったバイクを

破壊した。

つか、どんだけ力あんだよ……。

ニヤリ、と笑ったソイツの顔は完璧オトコだった。

それこそよくある恋愛映画の、低俗で卑しい敵役の男みたいな顔だった。

「あたしに文句言おうモンなら、このバイクと同じ目に遭わされるつてのが分かってんのよ。物分りの悪い誰かさんとは違ってね」

「あれ、それって私のこと？」

「当たり前じゃない！！」

「んー、どっちかってと頭の回転の方はあんたらの方が悪いんじゃない？」

！！！！

身の危険を感じて思わず飛び退くと、今まで立ってた所に鉄パイプやら石つぶてやらが転がっていた。

随分と命中精度高いんですなー。

「ホラ、そういうトコ。分かってる？ 力で全て片付けようとするところ、そーゆーのが頭悪いって暴露してるようなもんなの」

ガシャンっつ！！

「痛っ……」

背中フェンスが食い込んでいる。

それより目の前の鬼の様な形相の方が、ヤバイ。

「ざっけんじゃねえよ！！！！ チビで弱えくせして、ちまちま言つて咆えてんじゃねえよ！！！！」

唾が顔にかかってくる。

胸倉を締め上げられて言葉に詰まる。

早く、早く、早く、来てよ、ねえ

そろそろ、本気でヤバイ

力が・・・抜ける……………

ガッ

相手が拳を振り上げたとき、相手の額を蹴り飛ばした靴があった。いつもレールを越えて来るから、さび色だらけの古ぼけたスニーカー。

シャンツ

目の前に降り立った灰色のパーカー。

穿いているジーンズは所々鉄条網で引つ掛けた破れ目がある。

「よう、珍しいじゃねーか。お前がオレに助けを求めんなんて」

ずっと通話状態にしておいたケータイから、彼は鋭くこの状況を把握したようだ。

まあ、私も慶ならそれが出来ると思ってた電話かけたんだけど。

「やむにまれない事情でね、何とかできなかったもんで。まあ、二人でも何とかできるとはあんまり思えないんだけど」

唇の端を切ったオカマちゃんの憎々しげな目つきを目の端で捕らえながら、淡々と状況説明してみる。

「いや」

……………へ？

「オレ<sup>マジ</sup>だけで何とかできる」

本気？

「だ、だってあんな人数……………」

ざっと見て20人以上は居ますが……………。

「分かったから、大人しく待ってな」

言い終わる前に慶は走り出していた。

一番前の鉄パイプを振り上げていた男を、体を沈めて鉄パイプをかわしてから鳩尾に拳を叩き込んであっさり倒した。

それからの快進撃は留まる事を知らなかった。

あっという間に20人あまりが道路に転がっていた。

仕掛けた張本人のオカマちゃんは、慶の前で腰を抜かしてへたり込んでいた。

そいつを見る慶の目に、激しい憎しみの炎がちらついて、まるで慶じゃないみたいだった。

「ダメツ、手を上げちゃ・・・そいつと同じになっちゃうんだよ！  
！ そんなの…私がイヤっつ！」

口が、勝手に言葉を紡いでいた。

ピタッと動きが止まった慶に駆け寄り、そっと手を握った。

いつの間にか、あのオカマちゃんは姿を消していた。

黄色の線の内側へお下がりください（後書き）

次回このお話の最終話です。

今まで読んでくださった方、本当にありがとうございますm（）m  
でも、まあ二人のその後が気になるので番外編、やっちゃんいますv

v

## 終電

奴らが去った後の道路には無数のタイヤ痕が残っていたし、私の金網に押し付けられた拍子に切った腕の痛みが引いていなかったら、これは夢だっと思っていただかもしれない。

でも、全ては現実。・・・何が原因なのかはイマイチよくわかんないけど。

「慶・・・、今の人たちって」

なんだったんだらうね、と、さつきからその場に立ち竦んでいる幼馴染に声をかけた、ら。

「・・・・・・・・っ!」

ガバツと振り向いた慶に抱きすくめられていた。

「け、い……?」

首筋に熱い息を、鼻先で擦られる感触を感じながら、視界の全てを占領しているＴシャツに声をかけた。

「よかった……」

永遠とも思える時間が過ぎた後、呟くようにその男の唇が動いた。その低い声の響きが、私の心のどこかに優しく触った。

「ありがと・・・・・・・・、大好き」

それは自然と口をついて出てきた。

彼もまた、ますます腕に力を込めて囁いた。

「オレも」



4年くらい。待てるから」

それだけを、誓うように言って。

体を屈めて私の顔を覗き込んでいる慶に、その唇に口付けた。

「でもさ、来週まで、一緒に居ようよ」

ニコリと笑った顔が少しだけ、赤かった。

## 終電（後書き）

ま、私自身そんなに恋愛経験多い方では決して無いので、かなりの確率でワンパターンな物語になっちゃうんですよねー。ははっ  
そこんとこ、分かって頂ければ幸いです。

番外編：Airplain Road

よう

久しぶり、日に焼けた？

そう…かな？

うん焼けた。それに肩幅広くなってない？

長い間見てねえからそんな風に思うだけだろ

そんなもんかねえ。自分じゃ意外と気付かないモンだよ、そーゆーのって

変わってないな、紀陽は

・・・それって貶<sup>けな</sup>してる？

いや、ホツとしたって意味だよ

私の運転する車の後部座席で、（私からすれば）大男が体を横たえて眠っている。

そりゃさ、今までアメリカで暮らしていて日本の運転免許取ってないのは分かるよ。

でもさあ、恋人の運転する車で爆睡ってどうよ！！？

飛行機の中で寝てたんじゃないの！？

そりゃ飛行機のエコノミークラスって、狭いし寝にくいしそんなにリクライニング倒れないし。

もしかしたら寝れなかったのかも知れないけどさ。

そこは助手席に乗ってお喋りしながら、お互いの時を埋めようじゃありませんか！??

どうもそこら辺が、男と女の感覚の違いってもんなのかなあって思ったりする。

「……あれ、もう着いたの？」

「……ずっと寝てたアンタに言われたくないね、ちつとは起きてるよ」

「その口調も変わらないな」

ふいに柔らかな笑顔と共に、（まだ座っているから）見上げられたその目に、不覚にもドキッとしてしまった。

か、顔が赤いのは夕焼けのせいだー！ー！！

「それよかスーツケースは自分で運んでよ、重たいから」

「へいへい」

私の住んでいるアパートは1DK、セキュリティ付き。女の子だからって事でセキュリティは結構万全だ。

そのわりと自分では広いと思っっている玄関やキッチンに、自分より頭2個分ぐらい背の高い男が居るだけで、家の中が狭くなった気がする。

…ってか、慶ソファでうとうととしてるし。車でも寝てたくせに。ど  
んだけ寝るよ…。

ご飯、どうしようなあ。

今まで和食全然食べてないわけだから和食にしようと思うけど…  
、今は春か…うーん。

あー！ もう、めんどくさい。

「…で、結局白いご飯と味噌汁と鯖いわしの焼き魚と漬物と納豆なんだ」

「う、五月蠅い！！ 文句言うなら食うなー！」

「いやいや、文句ではなく感想を述べたまでさ。ああ懐かしい」

セリフ、棒読みですが。

あからさまな懐疑の視線を知ってか知らずか、パクパクとよく食べる彼。

ご飯のお代わりまで要求するとは…、亭主か！！！！

あつという間にたいらげて、お皿を洗おうとシンクの前に立ったとき、後ろから抱きしめられた。

「やつ！ な、何!？」

いきなりの事に動揺して振り向こうとしても、がっちりとした腕はビクともしない。

「オレのこと、スキじゃなくなった？」

頭の上から、降ってくる声は切なく震えていた。

「スキ、じゃなかったら、家にも上げないし、ご飯なんて作らない

…よ」

濡れていくお茶碗を見つめながら、回された腕に手をあてながら言った。

その途端、体がフワツと持ち上がった。

「え、なななな何っ!? やめっ・・・」

器用に流しっぱなしの水も止めて、ついでに私の唇も奪ったこの男は満面の笑みを浮かべて。

「ありがとな」

それだけを呟いて、私をソファの上にそっと横たえた。

番外編：Airplain Rord（後書き）

番外編はちょっとした自分へのプレゼントみたいなもんで（笑  
ホントはもつと慶にやらしたかったんですけどね。（変態！！！）  
ま、Rかけてないんでこの位かな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6266h/>

---

Train Road

2010年10月12日07時27分発行